

特257

56

13

44

大 典
菊 童
笛 卷
梅 之
楠 露
木 曾

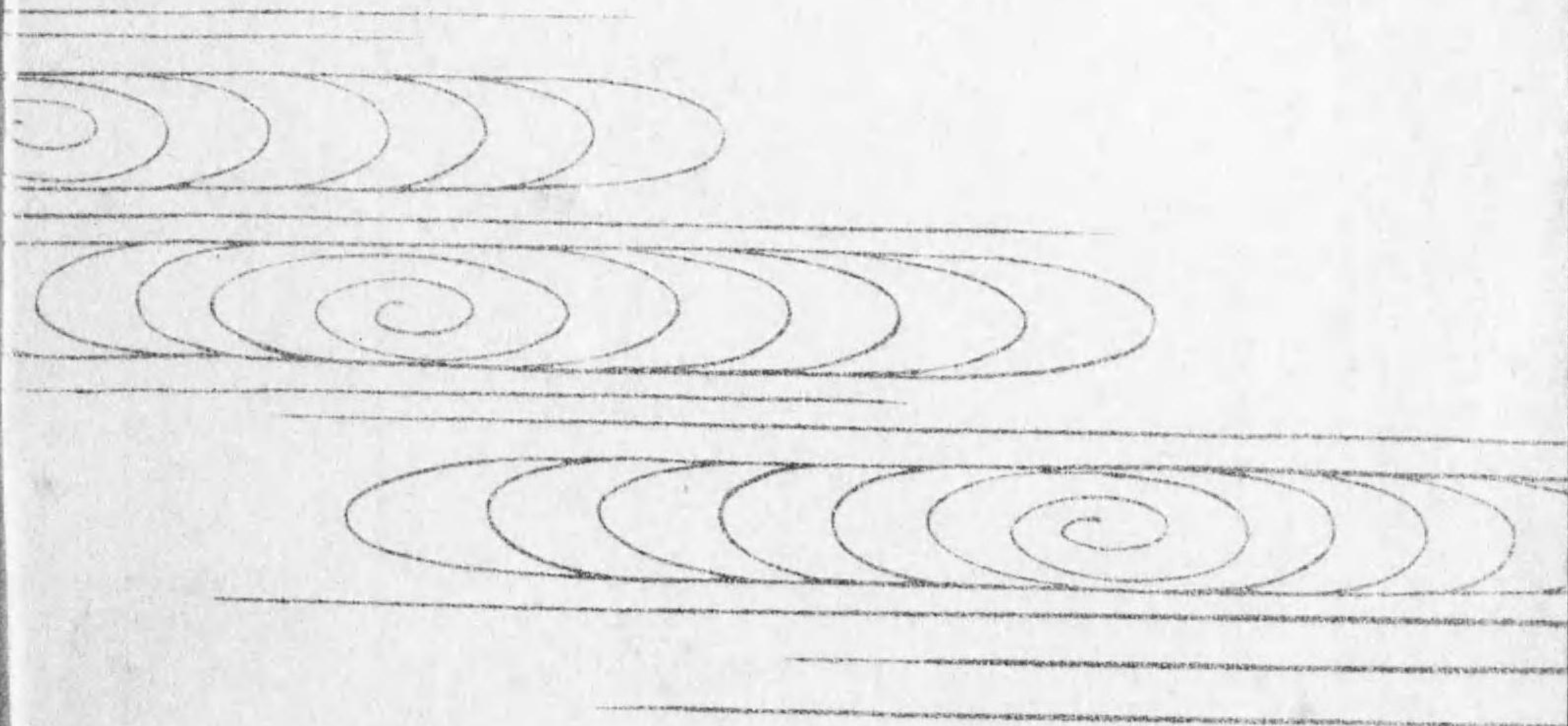
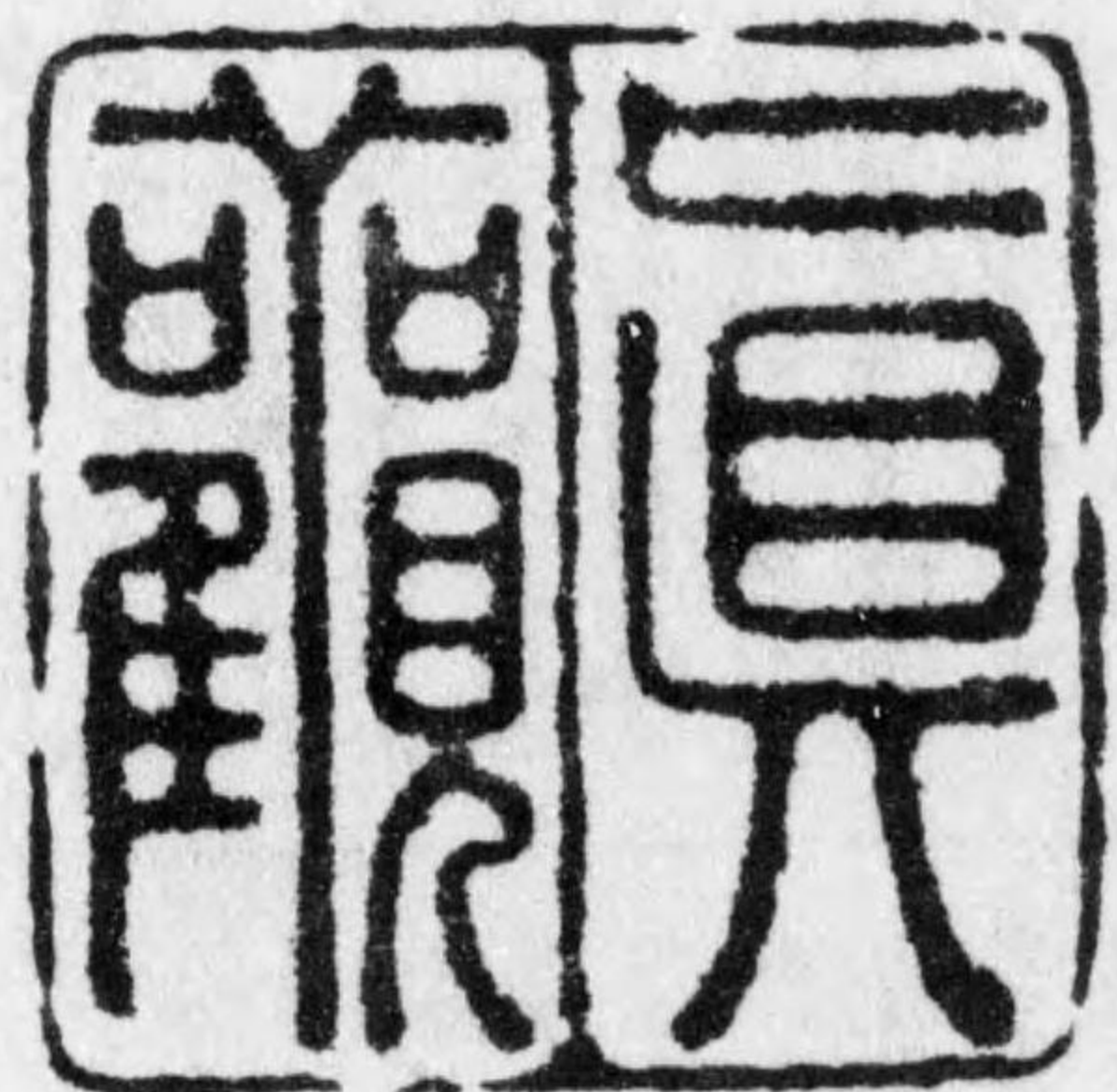
別七



始



第257
44





大典

梗概



本曲は 大正天皇御即位大典の節、新に作れるものなり。
 御即位の御大典御報告の勅使（ワキ）京都平安神宮に参向し
 て、大君の御稜威四方に普く、悠紀主基の御田も穂に穂を
 さかせの、黒酒白酒も數々の甕に溢れ、百官卿相聲を揃へ
 て、手代は八千代と壽き奉り、五節の舞や種々の妙なる音楽に
 感涙を催したる事の由を神前に聞え上ぐれば、不思議や社壇
 の方より異香薫じて瑞雲たなびき、微妙の音楽聞え來りて、
 天女（ツレ）天降り 羅綾の袂を翻して五節の舞を奏す。さ
 るほどに、御殿頻りに震動して、天津神（シテ）の神體現れ
 給ひ、神ながらのわが國の、わきて明治聖帝の御代に至りて、
 開國進取の國是を定め給ひし御志を、今上皇帝の紹がせ給ひ
 て、八紘に國威を發揚し給ふ聖徳をたゞへて、神舞を奏し、
 國土豊かに四方の國々も靡き従ふ大御代の、限りなき御榮え
 をことほぎ給ふ。

曲 初 五番目（略初能）
 季 節 十一月
 種 古 級 一級
 所 京都市平安神宮

謡ひ方

大正四年 大正天皇御即位式の際、出來し曲にして、御即位
 の目出度を祝ふ曲なれば、總じて強吟にて清らかに靜肅に謡
 ふべし。
 △シテ 健實に謡ひ出し、ツレとの掛合は朗かに、緩々と運
 んで「見ることし」と閉め、ワカは引立て、麗はし
 △ツレ 常の天女の如くさらりと、シテとの掛合は、
 助くべし。
 △ワキ 初能の如く、確かりと次第を謡ひ、名乗は健やか
 に「神宮に着きて候」と納め、一息置きて「ありがたや宇内
 に」と落着いて謡ひ、「時節を差へず」とゆるめ「心を澄ます折
 しもあれ」と閉かに素謡の節にはワキツレを略して一人にて
 謡ふ。
 △地 初同「悠紀主基の」と寛たりと出で「種々の」とゆるめ
 「いとも妙なる」と元へ戻し「不思議や社壇の」と乗つて閉かに
 「面白や」と閉め「玉もゆら」と運んで「御殿俄かに」と調子



を改めさらりと「この聖徳を」より乗つて、すらりと「舞ひ
給ふ」とゆるめ「嚴となりて」より伸んびりと走らぬ様に、
祝言の心にて、清らかに語らべし。

菊立輪冠

本曲後シテ輪冠に菊花を
翳して、之を黒頭の上に
頂きて出づ



他曲に用ひず

作 物	シ	ツ	ワ キツレ	ワ キ	装 束 附 (大典)
	子 天津神	レ 天 女	二從 人者	勅 使	
一疊臺 小宮 (又ハナシニモ)	面、三日月 黒頭 輪冠菊花カザス 襟縹色 着附厚板唐織 半切 拾狩衣 繡紋腰帶 神扇	紫地長絹 天女扇 面、連面 天冠 黒垂 色鉢卷 襟赤 着附縫箔 緋大口	着附無地鬘斗目 素袍 小刀 扇 内一人持太刀	風折烏帽子 着附厚板 白大口 長絹 繡紋腰帶 扇	

大典

素謹座席順
ワシ天
キテ女



霧^ク收^ウまりて。のどけき日^ヒ影^{カゲ}仰^{ウツ}
 四方^{ヨナ}の雲^{クモ}霧^ク收^ウまりて。四方^{ヨナ}の雲^{クモ}
 かん^カこれは當^{トク}今^{イマ}に仕^シ奉^{ホウ}る
 臣^{ミコ}下^{シタ}なり。さ^スても今^{イマ}度^{タビ}御^{ミコ}即^{ツキ}位^イ
 の大典^{ダイテン}ま^スますに^{ヨリ}より。奉^{ホウ}告^{コウ}の
 宣^{セン}旨^ジを蒙^{カウム}り。唯^{ホト}今^{イマ}平^{ヘイ}安^{アン}神^{ジン}宮^{ミヤ}へと

大典

冬サシ向カク仕ウケりノゆノ急ヒツカぎノ程ニ。これは
 早ハヤ神ジン宮ミヤに着まキてノありガたヤ
 宇ウ内ナイに國は多けレど類ひマれナる
 神シ國クニの豊葦ヨシ原ハラの秋津ツ洲シマ。天テン人ニン
 和ワ合ガ三サイ才サイの德具ツはリて天雲ウネの
 向ム伏フす限り谷蟻アリのさわたる極み
 大オホ君キミの清稜シヨウ威イの光普ホウくテ五イ日ニ
サシ上ラ「ありがたや」
拍子合

小話

の風も十日ノ雨も時節を差へ
同上 徳トク紀キ主ヌ基キの清田シタも徳に
キ切 徳トクをさかせつ。清田シタも徳に徳を
ユルメ 徳トクをさかせつ。天のこんづに類ひまべまさ
ユルメ 黒クロ酒シウ白シロ酒キウも數々ノ瘡カサに溢る
ユルメ ばかりなり。百官ヒャク卿ケイ相ソウ雲ウン客カクも千
ユルメ 代タに八千ヘン代ノと壽まきて。五節ノ舞マヒ
ユルメ



や種々のキレのキレいとも妙なる音楽に感
 涙肝に銘メづける。事の由をも神
 前に中聞え上げんと伏し拜む用ル心聞え
 上げんと伏し拜む。ワキ詞 確カリわれこの宮

居ホに詣マでつ。奉告ホウコクの式シキこと終り。
 心を澄スます折オリしもあれホト不思議ホトシロシや
 議ギや社壇シャダンの方カタよりも不思議ホトシロシや



社壇シャダンの方カタよりも異香キヨウカウ薫カウじて
 瑞雲ズイウンたなびき微妙ミウカウの音楽ガク聞ク
 え来てキテ天津テンジン少女シヤウメの舞マヒの袖スエ返ヘ
 す返ヘすも面オモしろシロやイリ外ス心天女舞テンメウ赤上アカノヘ赤返アカヘ



玉タマもゆらユラに少女シヤウメがキテ玉タマもゆら
 に少女シヤウメが羅綾ラジュウの袂ツボを翻ヒルし。五
 節セチの舞マヒの手テとりトリとりトリに天津風テンジンカゼ



雲の通ひ路吹きよら



神體出現

さへく暫し雲の通ひ路吹きよら
 て少女の姿とむらん神々も
 これを愛でけるにや下殿俄か
 に震動して玉の階踏み車轉かし
 神體出現。まゝませり
 あらありがたの神國やな天地開け
 し初めより八百萬の神達守護し

給へば我狄蠻夷の恐れなく萬民
 その堵に安んぜりわきて明治
 聖帝の序代に至り開國進取の國
 是を定め治に居て乱を忘れ給は
 す忠實勇武の民を養ひ知能徳
 器の成就をすめ天壤無窮の皇
 運を扶翼せよとの御志
 されば

今上キニシ白シヨオ帝カクも 父ツレ帝サアリの遺キ詔セを紹ウ
 がせ給イひて 允シテ文ヒス允ス武ブ八ハ紘クに 國ツレ
 威キを發ハツ揚ヤし給イふこと 鏡シテにカけて
 見ミるごとし 同ハル上サアリの聖ス德トを稱タへんと
 天アメが下シタなる蒼アヲ生ミも 思オモひ思オモひに心
 をつくし 君キミが千チ歳セをことほげば
 天アメつ序シ神カミも萬マン歳サイ樂ラクに 雲クモの端ハ袖ソデを



○獨吟
○仕舞
古代は



ひるがへし 舞マユひたまふ 神舞
 君キミが代ヤは千チ代ダイに八ハチ千セン代ダイにさサれいし
 のノ上ウヘ 巖イハとトなりて苔コケのむす 巖イハとな
 りて苔コケのむす 幾イ久クしとも盡ツきせ
 とな盡ツきせ 右ミ近チカの橋ハシ左ヒダリ近チカの
 櫻サクラもいイやまマに榮サカえ 惠メみの露ツユに
 露ツユふ 菊キクも今イマを盛シりて咲サき 句クひ 鳳ホウ



鳳も亭園の梧竹に下り丹頂の鶴
 は汀に遊ば圖員へる亀も川を
 出でて庭上に登向申しつ迹陵頻
 伽も亭空に翔り霓裳羽衣の曲を
 なせば山河草木國土豊かに四海
 の波も四方の國々も靡く亭代こそ
 めでたけれ。

菊慈童 作者不詳

梗概

唐土魏文帝の臣下(ワキ)酈縣山の麓より涌き出づる薬の水の源を尋ね見よとの宣旨を蒙り、やがて山に到れば、一つの庵あり。内より現れ出づるを見れば、その様化したる童子(シテ)なるに、如何なる者ぞと問へば、周穆王に召し仕はれし慈童がなれる果なりと答ふ。周の代は今より既に七百年を距てたるに、今まで生くることあらじ、いかさま化生の者ならんと怪しめば、帝の御枕に二句の偈を書き添へて賜はりたるを示す。寄りて見れば、「具一切功德慈眼視衆生、福壽海無量是故應頂禮」とあり。童子乃ちこの妙文を菊の葉に記せば、置く露の滴不老不死の薬となれりと語りて、樂を奏し、かくして菊の雫の集まりてなれる菊水の流れ、薬の酒を酌みては勸め、われもすくひては飲むほどに、岩根の菊を手折り伏せて酔ひ伏しけるが、もとより薬の酒なれば酔にも侵されず、その身も變らず、保ちぬる七百歳の齡をわが君に授け奉り、慈童はそのまゝ仙家に入りけり。

謡ひ方

枕慈童と同じ曲にて、輕きものなれど、輕卒に取扱ふべからず、同時に清く伸んびりと謡ふべし。
 △シテ 童子の姿なれば、サシは朗かに出で、ワキとの掛合は落着いて、穩やかに「枕の要文」と閑かに「具一切功德」と寛たりと「ありがたの妙文やな」と引立て、大きく「もとより薬の」と閑めて謡ふ。
 △ワキ 次第は健實に謡ひ出し、名乗は朗かに、シテとの掛合はさらりと、シテとの連吟は、シテの調子に従ふて謡ふべし。
 △地 初同「夢もなし」は寛たりと出で「此妙文を」と朗かに受け「面白の遊舞やな」ととくと閑め「則ち此文」と乗つて朗かに調子能く、以下段々と花やかに引立て、謡ふ。
 語釋
 山より山の云々―新古今集第十七卷、雜歌中に載す、太上天皇の御詠「住吉の歌合に山を」の題歌に、「奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん」とあり。歌童

は、深山荊蕀が下の道なき所をも踏み分けて、道ある世ぞといふ事を世人に知らせようといふ意にて、當時北條氏の跋扈、鎌倉幕府の無道なるを諷し、王道の明かなる世を萬民に知らせんとのことなるべし。即ちこゝにては山の奥まで徳政が行き渡つて居るといふことなり。

魏の文帝 — 曹操の子、曹丕のこと。

鄆縣山 — 支那河南省鄆州にあり。菊水潭にありて古來よりの名所。

邯鄲の枕の夢 — 蜀の廬生といふ少年、邯鄲の宿舎にて道士の枕に臥し、夢に王公の身となり、五十年の榮華を過したる古事、即ち諺の邯鄲これなり。

慈童が枕は云々 — 慈童が穆王に寵せられて居りし時、王の枕の上を越したる罪に依り、鄆縣に流罪されたること太平記に見ゆ。

身を知る袖は — 涙に濡れたる袖に我身の罪を思ひ知る意を含めていふ。古今集第十四卷、戀歌に載す、在原業平の歌、詞書に、「藤原敏行の朝臣の業平の朝臣の家なりける女をあひしりて、ふき遣はせりけることばに、いままうでく雨のふりけるをなむ、見わづらひ侍る。といへりけるを聞きて、女にかはりてよめる」として、「かずく」に思ひ思はずとひがたみ身をしる雨はふりぞ増される」とあり。歌意は、種々親

切にいはれるが誠に思ふやら思はぬやら、御心の程が知り難いので心配して居りしも、幸私の中が知られる雨が降つて來ました。此大雨に濡れても來てくだされば、私は深切に思はれて居る幸福の身と知ることが出來ますし、來てくださらねば不幸の身と知りませうとの意。

頼みにしかひこそなけれ獨寝の云々 — 戀歌を引用したのかとも思はる。然し出所は確知し難きも、戀の睦言も頼み難きことを恨みし意なるべく、即ち慈童が君寵を頼みしかひなく鄆縣山に流罪せられ、名残の枕にかけて怨恨の心をいひしなるべし。

野干 — 狐の異名。

けしたる — 化生と同じ。妖怪、變化の類。

人倫 — 人間をいふ。

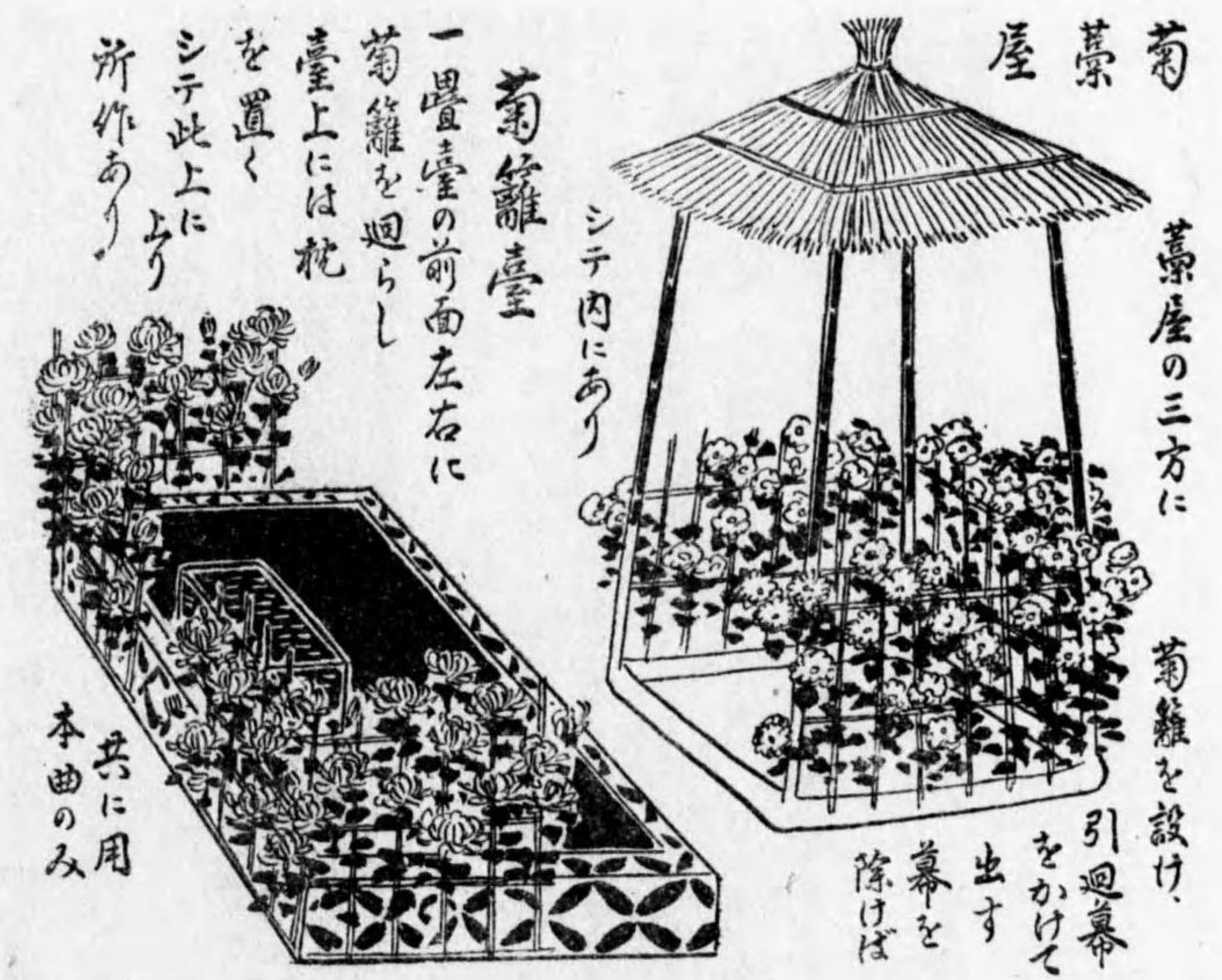
周の穆王 — 周の第五代の王の名。

周の代云々 — 周は武王より赧王まで三十七代、治世八百六十七年と太平記に見ゆ。實際は千年餘なりしとの説あり。要するに年代は、歴史研究家の起算加算の如何によるものと知るべし。

非想非々想 — 佛教々理にて、欲界、色界、無色界これを三界といふ。此欲界に六天、色界に十八天、無色界に四天あり。其中無色界の第四天即ち三界の最高世界を有頂天或は非想非

非想天といふ。此天に生れんと欲して修行する人は、下地の識無邊處天等の有想地を厭ひ、又無所有處天なる無想地を厭ひ、更に進んで入定するものなれば、詳には非有想非無想處といふ。世に所謂喜悅の絶頂に達したる容姿を有頂天といふも亦此意なるべし。

二句の偈 — 法華普門品に、「具一切功德慈眼慈衆生」とあるをいふ。觀世音菩薩の慈悲權化の徳、深廣なることを説ける文なり。即ち自ら衆生を救済するに必要なる萬善萬行の一切大功德を具有し、之を以て、億兆の衆生を一子の如く視て救済を垂れ給ふことをいふ。穆王が慈童を哀み思召しければ、普門品にある二句の妙文を授けたること、太平記に見えたり。菊の葉に — 慈童が毎朝に偈句を唱へけるが、若し忘れもやせんと思ひて、側なる菊の葉に此妙文を書きつけたり。此菊の葉より滴る露落ちて流るゝ谷水、皆天の靈藥となるをいふ。花を席 — 菊の花を席とする意。藥の酒 — 重陽の菊の酒は不老不死の靈藥なりといふ諺による。



装束附 (菊慈童)

小道具	作物	シテ慈童	ワキツレ 二同従人者	ワキ ノ勅使	装束附 (菊慈童)
		菊籠一疊臺 葉屋 (菊籠)	面、慈童又ハ童子 黒頭 金緞鉢巻 襟淺黄赤 着附厚板 半切 法被又ハ唐織壺折 縫腰帶 菊葉團扇	洞烏帽子 着附厚板 白大口 赤袴狩衣 繡紋腰帶 扇	

菊慈童

素謡座席順 ワシキテ

山より山の奥までも山より山の奥までも道あるや時代なるらん

これは魏の文帝には奉る臣下なり

さてもわが君の宣旨には麗縣山の麓より

水涌き出でたりその

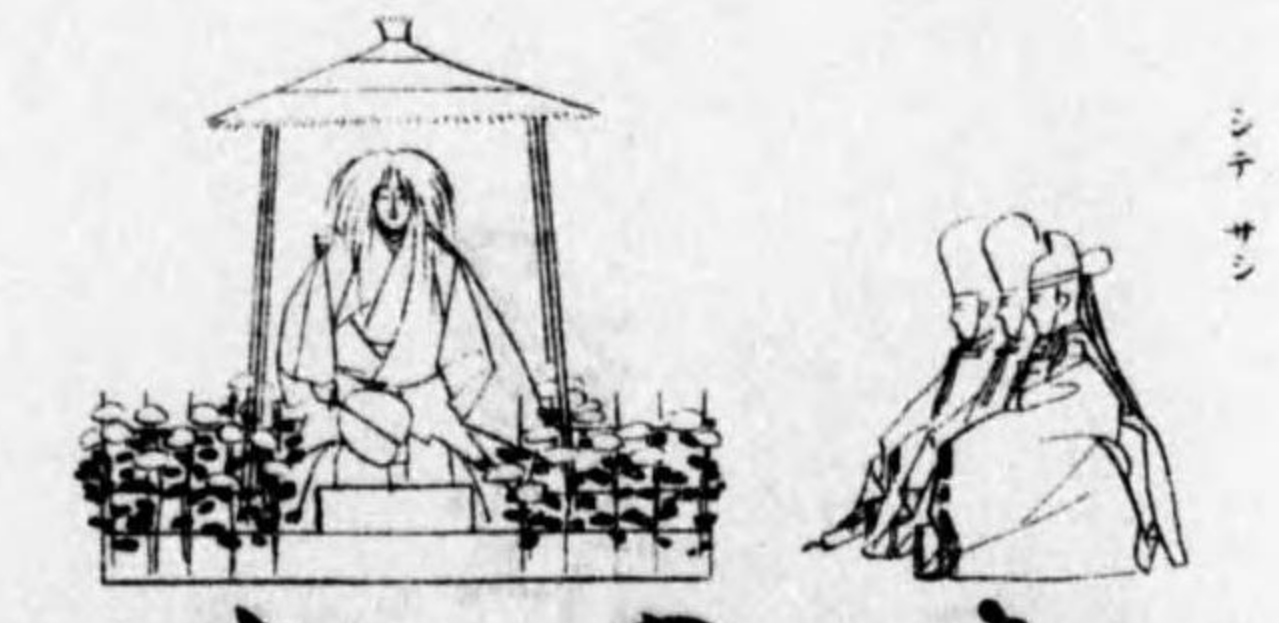
水よを見て冬をぬきの宣旨を夢り



唯今山路に赴き寄タリの急ぎとハツカハの程にこれ
ははや鄜縣山ケンザンに着きていこれに
庵イホリの見えていまづこのあたりに能

廻クワイ事の子細サイを窺ウカガはばやと存確カリじい
それ邯鄲カンザンの枕シの夢ユメ樂ラクむ事コト百ヒャク
年ト慈童ジドウが枕シは古コの思オモひ寝ネなれば
目メも合アはずト。夢ユメもなしナシいづ樂ラクみ
拍子三合ハズ 同上 困カニスラリ 拍子三合

○小謡



を松マツが根ネのホ切キいづ樂ラクみミを松マツが根ネのホ嵐ラン
の床トに假カリ寝ネして枕シの夢ユメは夜ヨもすが
ら身ミを知るシ袖スエは乾ホされずズ頼ヤみミにし
かイひコそナけレ独トり寝の枕シ詞コトぞ
恨イみナる枕詞コトぞ恨イみナる枕詞コトぞ
やなこの山サン中チウは虎コ狼ラウ野ヤ干カンの栢スミカなるに
これなる庵イホリの内ウチよりも現アラハれ出イづる

姿を見れば。その様化^{サマケ}したる人間
 なり。如何なる者ぞ。名を名乗れ^{シテ}。人倫^{ニテ}
 通はぬ所ならば。其方^{ナタ}をこそ化生^{シヤウ}の
 者とは申すべけれ。これは周^{シウ}の穆王^{ボクワウ}に召
 へばはれ。慈量^{ジリヤウ}がなれる果^ハぞとよ
 こそは不思議のいひ事かな。真^{マコト}し
 からず周^{シウ}の代^ヨは既^{スデ}に數代^{スウダイ}のそ

ワキカレ止
 ツヨク
 拍子ハ合ハズ

シテ用カニ九ヲ入レ

かみにて。王位もその數移^{カズレウケツ}りまきぬ
 不思議やわれはそのま^マにて。昨日^{キノ}
 や今日^{ケノ}と思ひしに。次第^{シヤブイ}に變^カるその
 昔^{カミ}とはさ^カて穆王^{ボクワウ}の位^イはいかに^{ワキ}。今^{イマ}魏^ヱ
 の文帝^{ブンテイ}前後^{ゼンゴ}の向^{ムカ}七百年^{シチヒヤクニヤシ}に及びたり。
 非^ヒ想^{サウ}非^ヒ々^{サウ}想^{サウ}は知らず人間^{ニヤウ}に於^オて。
 今^{イマ}まで生^イける者^{モノ}あらざ^ラいかさま

化生の者やらんと。身の怪しめをぞ
 なりにける。いかなほも其方こそ化
 生の者とは申すべけれ。忝くも帝
 の御枕に。二句の偈を書き添へ賜
 はりたり。まら寄り枕を。感覽ぜよ
 これは不思議の事なりと。各々まら
 寄り讀みて見れば。枕の要文疑ひ

○切途雜子

○獨吟
○仕舞



おもしろの遊舞かな

なく 具一切功德慈眼視衆生福聚
 海無量是故應頂禮
 菊の葉に置く滴りや露の身の不老
 不死の薬となつて七百歳を送りぬる
 汲む人も汲まざるも延ぶるや千歳
 なるらん。おもしろの遊舞やな樂
 ありがたの妙文やな。即ちこの文

107 108 109

10



所は郡縣り



菊水の流れ



すくひては池し



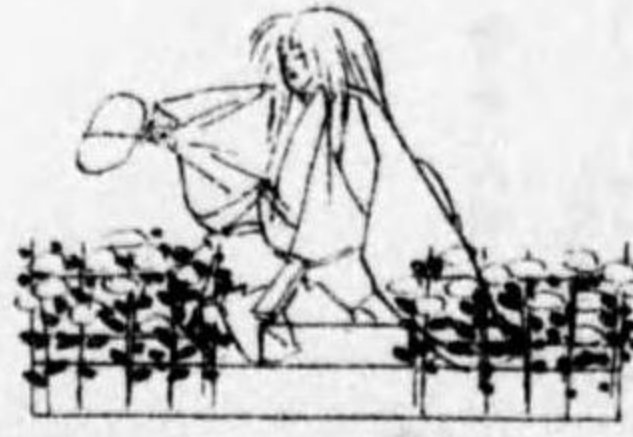
月は宵の同

菊の葉に即ちこの文菊の葉に悉く
 顯る。さればにや常も芳しく滴りも
 白ひ。淵ともなるや谷陰の水の所は
 鄯縣の山の滴り菊水の流れ。泉は
 もとより酒なれば。汲みては勧めすく
 ひては施。わが身も飲むなり飲む
 なりや。月は宵の同その身も酔ひに

枕を上げ戴き奉り



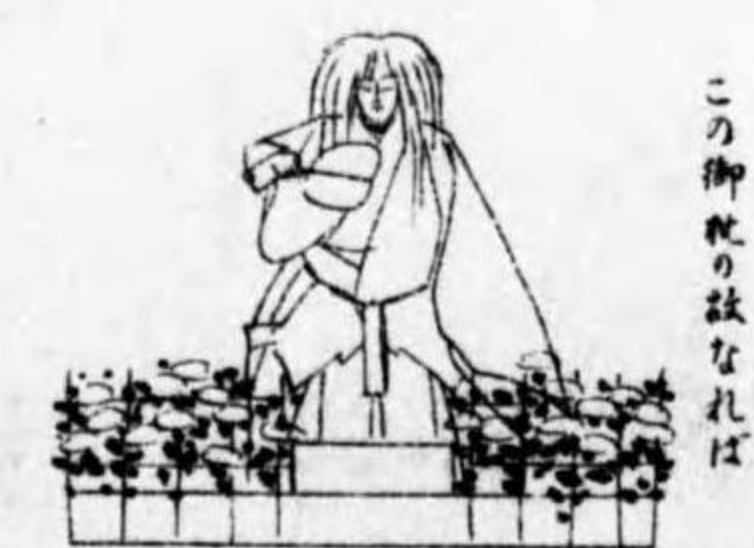
手折り伏せ手折り伏せ



花を庭にけりたり



引かれてよろよろよろよると。た
 よひ寄りて枕を取り上げ戴き
 奉り。げにもありがたまき君の聖徳
 と岩根の菊を。手折り伏せ手折り
 伏せ。敷妙の袖枕。花を庭に敷し
 たりけり。もとより薬の酒なれ
 ば。もとより薬の酒なれば。酔ひ



この御枕の故なれば

にも侵されずその身も變らぬ七
 百歳を保ちぬるもこの御枕の故
 なればいかにも久しき千秋の帝
 萬歳のわが君と祈る慈童が七百
 歳をわが君に授け置き所は麩
 縣の山路の菊水汲めや掬べや飲む
 とも飲むとも盡ませや盡ま



所は麩縣の山路の菊水



飲むも飲むも
盡ませしや



今にけり

せと菊かまき分けて山路の仙
 家にそのまゝ慈童は入りけり。

Handwritten notes in cursive script, likely a transcription or commentary on the piece.

笛之卷

作者 不詳

梗概

義朝の遺臣羽田十郎秋長（ワキ）は、鞍馬寺に上りし牛若が學問をばなさで、夜な／＼五條の橋に出で、數多の人を斬り、上下のわづらひとなる事を憂ひ、牛若（子方）を伴ひて、母常磐（シテ）の館に赴き、教訓を請ふ。常磐涙ながらに、さやうの事をなすならば、母とも思ふな子とも思はじと、不孝の罪を戒め、傳來の笛を取り出し、蟬のもとに巻き隠したる錦を解き、虫喰の文字となりて、「一萬五千三百餘歳經て弘法大師の御手に渡り、その後義朝の末の子牛若が手に渡るべし」と記されたるを示す。やがて牛若は、母の命に従ひて明けなば寺に上らん、今宵ばかりを名残にせんとて、五條の橋に出で立ちぬ。

これより「橋辨慶」の後段と同じく、牛若（後子方）武藏坊辨慶（後シテ）を散々になぶつてうち懲らし、終に主従の契約を結びて九條の御所へ歸るなり。

曲柄 四番目（略二番目）
季節 九月
稽古 準高等ノ部
所 京都

謡ひ方

橋辨慶の前の替なり、一の獨立したる曲に非ず、番組に書く時には小書の如く橋辨慶 笛之卷 と書くなり。

位は橋辨慶と同じ様なれど少し閑かなる心あるべし。文中笛を譲る文句なれど、古はクセとロンギの間に、上端にて又この笛は父上の。童に預け給ひしを。身に添え持ちし笛なれど。得たる便りの有るゆゑに。御身に譲り申すなり。急ぎみ寺に登りつゝ。たゞ何事も打ち捨てて學問おこたり給ひそとあれば、意味明瞭たるべし。

△シテ 調子を抑へめに、閑かに謡ひ出し「扱只今は」と一寸間を置いて出で「さて牛若殿は」とかゝつて出で「いかに牛若殿」と母たる位を取りて、閑かに、「いや／＼おことの」と穏やかに「母と思ふな」と確かりと「子とも又」と抑へてロンギはしつとりと調子を収めて謡ふ。

△子方 さらりと、シテとの掛合は叮嚀に、ロンギはさらりなれど、拍子に合ふ所なれば、其心得を以て謡ふべし、「いか

に羽田」とはつきりと

△ワキ 總じてさりと、シテとの掛合は叮嚀に

△地「思ふまじけに」とすらりと受け「者の心や」とゆるめ「よしや親子をも」と朗かに出で「泣き居たり」と閑め、クセは閑かに出で、段々と運び「涙かな」と閑め、「今こそ委くは」とかゝつてすらりと出で、漸次はんなりと、「忝じけなや」と少しゆるめ「明なば寺へ」と引立て、以下晴やかに諷ふ。

語釋

義朝 — 源爲義の子、保元元年崇徳上皇の兵を徴すや、爲義諸子を率ゐて参候す。義朝獨背きて禁裏に赴き、平清盛と共に兵を督して夜白河殿を襲ふ。義朝風に乘じて火を放ちて攻む。宮殿忽ち焼亡し上皇の兵皆潰走す。義朝功を以て左馬頭となる。後清盛と好からず、藤原信頼と共に清盛を討たんとし却て敗戦し近江に走り、美濃に入り青墓の富媪大炊の家に投ず。邑人群起して大炊に迫るを以て遁れて尾張に行き、長田忠致の家に入る。忠致素より權勢に附く佞者なれば、伴りて義朝を浴室に誘ひて刺殺す。義朝時干年三十八。

常磐の御腹には三男 — 常磐は義朝の妾、其腹に生れたる兄弟三人あり。牛若丸は其三男とのこと。

牛若 — 義經の幼名、七歳の時法師になさんとて、鞍馬の別當阿闍梨東光房に頼みしこと、義經記、平治物語等に見ゆ。

鞍馬寺 — 鞍馬山は京都府山城國愛宕郡にあり、其山腹にある寺院を鞍馬寺といふ。延暦十五年、藤原伊勢人の建立するところ、鑑真和尚を開祖とす。後頼房に屬したるを、昌泰年中、峯延法師之を再興す。今は天台宗山門に屬せり。本尊の毘沙門天像世に名高し。

學問をばなし給はて云々 — 義經記、牛若鞍馬入の事の條に「十五と申す秋の頃より、學問の心以ての外にはかりけり。其故は、舊き郎黨の謀叛をすゝむるにてぞありける。」とあるをいふ。

五條の橋 — 京都五條の橋のこと。昔は今の位置にあらず今の松原橋の處なり。

他山の閑え — 他の寺へのうはさ。延暦寺、三井寺等の寺坊を指す。

寺家の覺え — 寺中の評判の意。

思ひ思はぬ — 親子の情を思ひ、子の身の行末を案ぜざるやうな母親にてあらざりせば、御身の爲には却て都合よかるべしとの意。

鳩に三枝の禮 — 鳩は親鳥の留り居る枝より三度去つて下枝にとまり、決して親鳥の居る枝に留まらず。即ち親子の禮を示したる意。

鳥云々 — 古語に、「鳥者猶有反哺之心、况人而無孝心二者

乎」といふことあるを引く。

六波羅の云々 — 平家方の邸宅のある所。

理の不審 — 道理あるたづね方をいふ。即ち尤もなる不審の義。

蟬 — 笛の歌口の背面に竹の節を少し切り、これを木にて塞ぎ埋めたるものゝ稱呼。今に笛の背面に木にて埋めあり。

蟲喰 — 虫喰の文字跡あるといふて、神秘の告をなせるものとかけていふ。

一萬五千云々 — 虫喰の文字なり。

弘法大師 — 名空海、眞言宗の開祖。

かまへて — 心にとめての意。

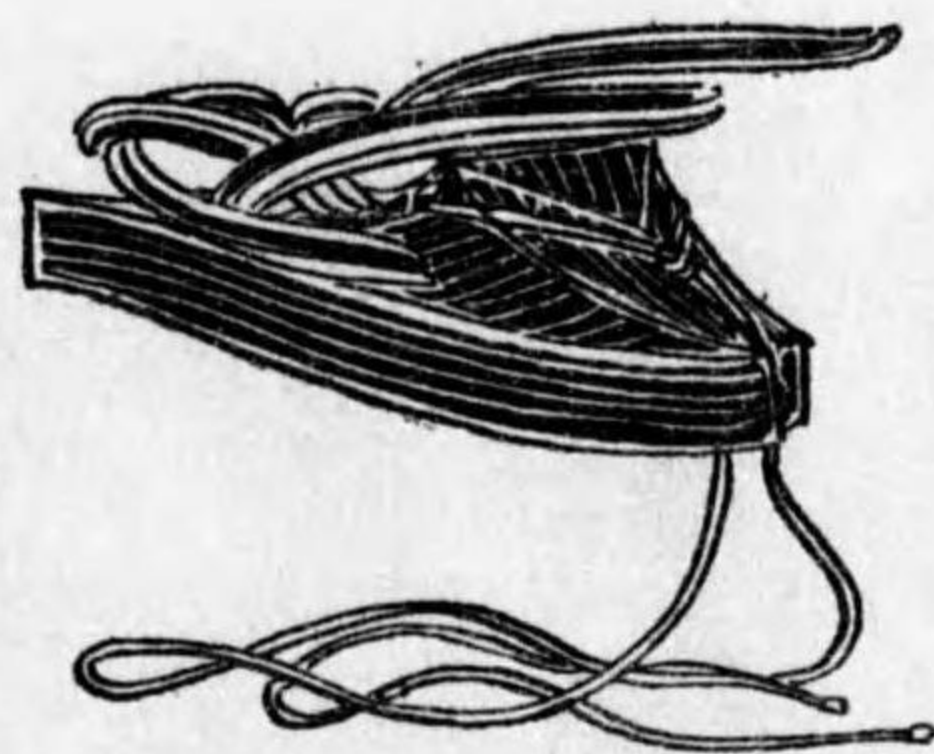
立ち待ちに — 陰曆十七日の夜の月を立待月といふによる。即ち五條の橋上に立ち、月の上るのを待つとの意。

笛

青竹にて作り歌口の部に紅綴を巻く他曲要なし

小結烏帽子

童子の用にして紅白緑の色紐を



美しく掛緒として結びつく。本曲及び烏帽子折の牛若、また



楠露の正行、仲光の美女あ前、攝待の子方等に著す。

異例として木賊のシテ尉も後段にこれを用ふ。また童子用の意を以てなり。

笛乃巻

素謡座席順

ワシ子
キチ方

早羽田詞 確カニ



羽田の十郎秋長にてい。さても

義朝の御子常磐若の御腹には三

男。牛若殿と申して。處座のを。学

問のため。に鞍馬の寺へ御のほせ

處座の處に。学問をば。給はで。

給はで。

作物	子	ワ	ワ	装束附 (笛之巻)
	方牛若	キ羽田秋長	キ常盤	
笛	小結烏帽子 襟赤 着附厚板 白大口 長絹 繡紋腰帶 扇	侍烏帽子 着附厚板 白大口 掛直垂 繡紋腰帶 扇	面、深井 鬘 無紅鬘帶 襟淺黄 着附摺箔 無紅唐織着流	

夜な夜な五條の橋に出で。數多
 の人を御斬りゆ。上下のわづらひ
 かたがた以て然るべからずゆ程に。
 常磐の御方に参り。この事を
 教訓させ申さばやと存じゆい
 かに申し上げゆ。秋長が参りてゆ
 になに秋長と申すか此方へ参りゆへ。
シテ母 閑カニ

氣ヲカヘ
 さて唯今は何のために来りたるぞ
ワキ 確カニ
 唯今冬る事餘の儀にあらず。鞍
 馬の寺に在る牛若殿。夜な夜な
 五條の橋に御出であつて。數多の
 人を御斬りゆ。上下のわづらひ方が
 もつて然るべからずゆへは。此方へ
 御申しあつて。教訓あれかしと

存じゆシテ閑カメ。さて半若殿はいづくに

渡りゆぞワキサマリ。あれに在るゆシテスマリ。此方へ

申しゆへワキ確カニ。畏つてゆ。此方へ御参りゆ

いかに半若殿。この程は寺にあるか

とこそ思ひシテ位ヲトリ閑カニ。何とて此方へは下

りたるぞチカ半若スマリ。とんび久しく母上を見

参らせずゆ程に参りてゆシテ位ヲトリ閑カニ。いやい



シテ位ヲトリ閑カニ



チカ半若スマリ

シテ位ヲトリ閑カニ

やおここの心を見るに。思ふといふも

虚言よシテ位ヲトリ閑カニ。この程平家の公達の肩

をならべアラン。を争ひ。同じ寺中チカに

ありとも。学問にだに勝れなば。

他山オホサナの圓え寺家の覺えオホボ。かたがた

母も嬉しう思ふべきに。学問をこ

とせざらぬ。夜な夜な五條の橋に

○曲留迄獨吟

出で人を失ふよきを聞くぞとよ真
 さやうにあるならば母と思ふな子
 とも又同思ふまづげによしたやな
 かほどに母は思へどもそのかひ更
 になまきはかりてもよしぞな
 きうたての者の心や元美シよしよし
 親子をキコもよし親子をキコも思



ひ思はぬ中ならばなかなかに安
 からぬ御身のためは然るべし如何
 なれば畜類又は空飛び翔る鳥も
 その理をコト知ればこそコト鳴に三枝の禮
 をなしウツク鳥カラスきうきうの孝行なるは
 いかばかりウツクなどや御身は不孝なる
 とウツク比れば牛若もウツク羊を合はせまら

寄りてゆるし給へと後き居たりお切
 おことまた雅かりし時よりも父に離片クセ
 れてむさんやな敵の手にも渡りな
 ばいかなる淵川の瀬にも沈みもやせ
 ましと心に懸けて思ひ寝の夢の
 一時花の夕べの山嵐ウツク聲高く泣く時
 は六波羅の人やもし聞くらんものを

悲やと忍びて落ちしも今思ひ出ニルメ
 の涙かなチチノキミ母の仰せの重ければ明
 けなば寺へ上るべしサガなりながらこの笛に
 得たる便りのあるぞとは如何なる謂イハ
 れゆぞシテトげに理の不審かなこれ
 は弘法大師として貴き人の御笛を
 傳へたる故なればかやうにわれも

いふぞとよ子方上「そもや大師の御事
 は。久しき事と聞くものを傳へ給ふ
 は如何ならんミテ上「これはもと入唐
 の。商人もてる笛なるはその虫喰
 のあるぞとよ子方上「さてはしるしの何
 ぞとも。現し給ふ文字やらん委し
 く語りおはしませミテ上「これ忠賢せよ

今までは人にも隠し御身にも

子方見せさせ給ふ事もなまきに同今こ

そ委しくは見も明石鴛島隠れ

竝ぶや蟬のものとに。巻き隠したる

錦を解きてよく見れば。不思議

やな虫喰の。一萬五千。三百餘歳

経て。弘法大師の御手に渡りその



解きてよく見れば

後に。義朝の末の子牛若が手に
 渡るべしと。たゞかななる虫喰かたじ
 けなやと戴き。明けなば寺に上る
 べし。かまひておこと偽るな。又よと
 母はいひ捨て。常の住家に入り
 けり常の住家に入りけり
 しかに羽田。母の仰せの重ければ。

子方詞カリメサリ



いかに羽田

明けなば寺へ上るべし。今宵ばかり
 の名残なれば。五條の橋に出で
 立ち待ちに月を眺めうずるにて
 あるぞ 畏つてい



是ヨリ常ノ橋辨慶ニナリ前シテヲ除キ
 下ニても牛若ハ母ノ仰セノ重ければト續ク

梅

左近元章作

梗概

京都五條わたりの人藤原何某(ワキ)難波津に下り、浦の景色を眺めて、家持の古歌を思ひ出で、「櫻花今盛りなり難波の海、おしるる宮に聞しめすなへ」と吟じ、今は花未だふみみて梅の盛りなりといひけるに、一人の女性(シテ)出で來り、かの歌を櫻花といふは今の草子の文字誤りにして、梅の花といふが眞なりと教へ、様々和歌の道を説き、今宵はこの木のもとに下伏して待たせ給へ、夜もすがら月の影もさし出でて、おほろながらも慰めんといひ捨て、梅の蔭に隠れ入りぬ。(中入)

やゝありて、梅の花の精(後シテ)さも美しき女となりて現れ出で、梅の木は花を賞し實を棄とし、枝は神事佛事に用ゐられて、いと徳高きものなりと述べ、「鶯の聲ものどけき春風に、梅の匂ひや天に満つらん」と謡ひて、舞を奏し、草木に至るまで大君の恵みに洩れぬを喜び、君が代の限りなき御榮えをことほぐ。

曲 節 三番目
 季 節 二月
 種 古 重習初傳
 所 播津園藤波浦

謡ひ方

重習初傳にして、三番目の品好き靈物なれば、全體に幽雅に、粘らぬ程に、重んもりと、優に麗はしく謡ふべし。
 △シテ 呼掛は品よく閑かに出で「ふゝめりし花の」としつとりと、以下文句に心附け「濱の眞砂は」より少し運びめに、「さりながら」と閑かに地へ渡し、ロンギは調子上らぬ様に閑かに美しく謡ふ。

△後シテ 前よりは調子花やかにめに「月うつる」と中吟にて寛たりと謡ひ出し「いかに客人」と氣を變へ朗かに「人にな洩らし」と崩して閑かに「知ろしめさねば」とかゝつて「天にます神の」より段々と詰めて「覆槽の音」と寛たりと地へ渡し、サシはゆるやかに、上端はむつくりと、ワカは麗はしく引立て、「春風に」とたつぷりと「人民も」と伸んびりと謡ふ。

△ワキ 三番目の位を取りて、閑かに名乗り出し、サシは寛たりと、下歌は氣を變へ閑かに、上歌は長閑に「面白や難波

の浦の」と改めて四方の景色を詠むる心地にて「櫻花」と歌を詠する心なれば、しつくりと、シテとの掛合になりてはすらりと、待詠は伸んびりと、後のシテとの掛合はかゝつて「汀の蘆は」より段々と詰めて詠ふ、素詠の時はワキツレを略して一人にて詠ふ。

△地 「うらやすの」と閑かに出で「古歌の有るべき」と閑めロンギは調子を改めて、うつきりと閑かに、中入前を閑めて「おのづからなる」と朗かに受け、少し運んで、クリは引立てゝたつぷりと、サシは閑かに、クセも閑かに優美に「とれよとぞ」とゆるめ「天皇の」より元へ戻し、少し運びめに、上端は引立てゝ寛たりと「月もおしてる」と改めて閑かに「梅の匂や」と乗つて朗らかに「恵みに洩れねば」と豊かに附けて、以下乗よく引立てゝ、晴れん」と「めでたさよ」と閑めて詠ひ納む。

能の異式

彩色

和扇之舞

習留

弄月之舞

素囃子

小書に非れども常は太鼓なけれども舞に太鼓入る時は重くな

んと詠みしなり。

大さゞきの天皇 — 仁徳天皇の御事。

濱の眞砂はよみぬとも — 古今集に、「我戀はよむとも盡きじ荒磯海の濱の眞砂はよみつくすとも」とあるを引用す。

人の心を種として — 古今集の序に、「大和歌は人の心をつねとして萬の言の葉とぞなれりける」とあるを引用す。

うらやすの — 日本の形容詞で、心の安んずべきをいふ。

鬼神をも云々 — 古今集の序に、「鬼神の心をもあはれと思はせ」とあるを引く。

闇にもしるき — 古今集第一卷、春歌上に載す、紀貫之の歌詞書に「くらぶ山にてよめる」として、「梅の花にほふ春べはくらぶ山間にこゆれどしるくぞありける」とあり。歌意は何時もと違ひ梅の花の咲き匂ふ春の頃は、取り分け闇といふ名のくらぶの山を真夜中に越えて往つても、梅の花が判然とよく知れるとの意。

玉かづら — 髪飾をいふ。

覆槽 — 桶の如き空虚なるものを逆さまにして、其上を踏み鳴らし、其音を拍子にするをいふ。天岩戸前の神樂の時この樂器ありしといふ。

包井 — 草木等にて掩はれたる井。隠す意をうけて深き心の底といはんための動詞。

り。後シテ天冠に梅花をかざし戴き
シテ又
難波の浦

語釋

山崎 — 京都府山城國乙訓郡大山崎村。

關戸 — 山崎の西隣、攝津國三島郡、關戸の明神あり

芥川 — 所の名、大阪府攝津國三島郡芥川村。

なごはしみ — 芦の若葉の如く、心の和らぎ慰むこと之意。

櫻花今盛なり難波の海云々 — 萬葉集第二十卷に載す、大伴

家時の歌、「櫻花、伊麻佐可里奈里、難波乃海、於之互流宮

爾、伎許之賣須奈倍」と、即ち「さくらばな、いまさかりな

り、なにはのうみ、おしてるみやに、きこしめすなべ」とい

ふなり。歌意は、櫻花も難波宮も並びて盛なる意にて、おし

てる宮とは難波の皇居をいふ。

今の草紙 — 萬葉集の今に傳はりたる本をさす。

ふゝめりし花の始めに來し云々 — 萬葉集第二十卷に載す、

兵部少輔大伴家持の歌、「布敷賣里之、波奈乃波自米爾、許

之和禮夜、知里無牟能知爾、美夜古徹由可無」と、即ち「ふ

ふめりし、はなのはじめに、こしわれや、ちりなむのちに、

みやこへのかむ」とあり。勅使の難波まで來りて京へ歸る意

なるべし。即ち櫻の含める時になつて散りなむ後に京に行か

くはしければ — 好ければといふに同じ。

ずはえ — 木の根本の方より眞直に生ひ延びたる枝をいふ。

きぬがさ — 絹にて丸く作り網を引きて四方より控へ持つや

うに出來たる傘。天皇の行幸の時御めし用なり。

初春の七日の豊明 — 正月七日には白馬節會と云ふ行事あり

て、内裏にて宴を群臣に賜はるをいふ。

大嘗 — 毎年十一月に當年の新穀を伊勢神宮其他の神にも奉

り、天皇自らも召し上り初めを遊ばさるゝ御儀式あり。之を

古は大嘗と稱へしを、後世に至りては新嘗と云ひ替へ、天皇

御即位の年にあるを特別に大嘗と云ふことになれり。此處は

上古の稱を用ひしなり。

小忌 — 祭服の名。

昔のうずの心ばせ — 草木の花葉などを頭に挿して飾にする

を上古には「うず」と稱へたり。其心意氣を遣せるとの意。

巾子 — 冠の堅に高きところをいふ。即ち柱の如く立ちたる

ところをいふ。

天の日蔭 — 日蔭の葛は深山の地上岩の上などに長くはう草

の名。之を冠につけて長く垂らす、神代以來神事に携はる

官人の慣例なり。

かづらして — 日蔭のかづらを垂らしたるをいふ。

黒酒 — 玄米にて造れる酒。

白酒 — 白米にて造れる酒。黒酒と共に神に奉る例なり。
 樽領巾 — 楮の皮にて織れる物を「たく」と云ふ。領巾は上古の女の禮服につきたるもの、袖のあたりにひらくとせしものならんといふ。
 撫づとも云々 — 拾遺集に載す、讀人不知の歌に「君が代は天の羽衣まれに來て撫づともつきぬ巖なるらん」とあるを引く。即ち御代の天壤と共に無窮なるに譬ふ。

問狂言

所の者。

梅立天冠

天冠に白梅を立て
 本曲の後シテ之を頂まき
 出づ



他曲には用ひず

装束附(梅)			
後シテ 梅ノ精	前シテ 女	ワキツレ 二從 人者	ワ キ 藤原某
面、若女 薑 薑帶 天冠(梅花カザス) 襟白二 着附摺箔 絆大口 紫長絹 胴箔腰帶 薑扇	面、若女 薑 薑帶 襟白二 着附摺箔 唐織清流	着附無地熨斗目 素袍上下 小刀 扇	着附段熨斗目 白大口 掛素袍 繡紋腰帶 小刀 扇

梅

梅

梅

素謡座席順
ワシテ
ワキテ

ワキ男詞 裕カニ



これは五條わたりに住居する藤

原の河某にてゆさてもわれ未だ

難波津を見ずゆ程にこの度一見

せばやと思ひゆ津の國の難

波の春のゆかさにはけよ思ひ立

つ旅衣日影のどけき都の空



梅

梅

霞隔たる山崎や開戸の宿も
 名のみにて戸さぬ声代は行き
 か人の姿さげにゆたけしや
 下歌 カヘテ 柏子三合
 らはいづこそ舊年の木の葉も
 上歌 ステリ
 積る芥川しばしなからの旅心
 蘆の若葉のなごはしみ蘆の
 若葉のなごはしみ風も音せ

で寄る波の響きはさすが聞き
 て恋難波の浦のうらなる春
 の景色を今ぞ見ん春の景色
 を今ぞ見ん面白や難波の浦
 の春の景色。里は花咲き白ひ満ら。
 遠の山々うち霞み青海原は白
 波の八重折る上に海士小舟行き



かし様は古の。家持の卿の詠め
 まて思ひ出でられての。櫻花今
 盛りなり難波の海あしてゐる宮
 に聞めすなへ。今は花未だ含
 みて梅の盛りにての。呼衛。なうなう
 今の歌をば。など真のまゝに吟
 じさせ給ひゆはぬぞ。不思議や

なかの歌は萬葉集にありつるを。
 たゞそのまゝに口ずかすゝに誤り
 ありや。覺束な。もとも今の章
 子にはなごめれど。この歌は家持
 の御未だ兵部の輔なりし時。
 公事にてこの國にませ。程。二月
 の十まり三日詠み給へり。とて

三月の三日神にありし花のはじ
 めに來しわれや詞優散りなん後に都へ
 行かんと春の始め都を出でて今
 暫しまますべきにかく詠み給ひしかば
 かの二月の中の三日は梅の花
 こそ盛つならめそのよあつて
 る宮に聞しめすなとはは大鷲鷯



の天皇の清位に即かせ給ひし事
 なればかたがたいかで櫻の歌なる
 べき口考げに理なり中古ま書には文
 字の違ひのやあればよく辨へ
 て見るべかりけり詞

ままで分き給ふ御身は如何なる人
 やらんシテいカニや誰とてコト理ツツのまにまに

聞しめさし人にはその人の名は不用
ならんまづまづまきの御言葉の
末に花未だ含みて梅の盛りと宣
ひき梅の盛りは花ならずや
「まことにこれも誤りなり。何の花
をもぞれのみにては花とのみ詠め
ど異花とならべていふに櫻をのみ。

○小 謡

花といふなる古言はいかでその跡
荒磯海濱の真砂はよみぬとも。
歌の言葉の數々は人の心を
種として詠み出づるなるもの
からに「トもの盡きせどなほり
ながら「うらやすの安き神代の
傳へとして。安き神代の傳へとして。

梅

五

ワキスリ
カレ上末
サリ
ワキ
サリ
シテ
困カニ
上歌同
ウケテ確カニ
拍子合
元後シ



まうけて身みまつる
登の道

まうけで詠み出づる歌の道直
 なればこそ鬼神を和むく
 なれいかでさる浮かある古歌の
 あるまき甲 聞けばいよいよしちじるまき
 歌の理木綿四手の神の示しか
 ありがたや神かとはうたてはか
 なまき天少女た夕風に難波江



このまのちにて
下伏して

のあしやよしも辨へてそよと聞
 えし恥かすや地上今はそのみな色
 み井の深き心の底ひなく聞かま
 くほしやシテあらば同この木
 つもとに下伏して待たせ給は
 夜もすがら月の影もさし出でて
 朧ながらも慰めんと梅の蔭に入ると



朧ながら慰めんと

平賀三上歌
待謠

見えて跡も見えずなりにつけり
跡をも見せずなりにつけり中入間
春の夜の月待ちかての枕さへ
月待ちかての枕さへ寂りあへず
まく夜手に移るその香は隠れ
なき闇にもしるき木蔭かな闇
にも梅の木蔭かな



後シテイ



梅ノ精

月うつる難波の海の夜の波心
もゆたに面白やいかには客人この
夜らは空もいとよき晴れ渡り
月の光も晝なして老の姿も
あらはならん人になつらへ給ひ
そとよこはにかにありし女の顔
ばせながら錦の衣玉髪がら姿は

梅

シテ詞 閑カニ優ニ

木の花の精も今は思はず
 知ろめさねば御理もとより梅の
 精なればたゞその折に従ひて定
 まる姿もあらぬ上舞をかなでて
 慰めんとかくは現れ来りたり
 まづまづかゝるなりながらかたへに
 人の影もなし琴笛鼓は誰やせん

シテ詞 閑カニ

カル上木

天にます神のおきての風のまに
 松の小枝は琴を調め 汀の蘆は
 笛を吹き 岸おつ波は 霞槽
 の音 おのづからなるもの音は
 神さぶるこの浦の昔を返す袖
 ならぬ 打掛ともも神代のならは
 し草を賤く木を貴むその木の



神さぶるこの浦の

○サシ曲獨吟
○切迄雜子

中にかはかりの形色香の花なけ
れば梅花を嘉して木の花とい
り。さて梅の名はさる花の咲き
出るの又かうるはまき 薬の實へ
結びつ。木の肌妙に木立まで異
木に勝れくはしければ とうまでよ
言を。通はせて 梅のその名を

○仕舞

ゆりたるなり 竹 耳 クセ 下 雨 かん
赤切 梅 子 命 歩 上 神 事 の
赤切 宮 人 に 取 ら ず する も
本はこのずはえに限る事なりま
又赤佛の赤教へにも 行ひには必ず
梅のずはえを取れよとぞ 天皇の
大儀の赤場にも 至殿の舍人等
が梅のずはえを捧げつ 紫の蓋の

毎

七



神を奉りしむる

頭にはん奉れるは。侍先を拂ふよ
しにそて。やがて神代の傳へなり

引立千代儼
ミテ止



舞の臺の飾らひ

初春の七日の豊の明には舞の
臺の飾らひに梅と柳を立てら
る。さそて木綿花は古にもてはや
せしもこの花をどころへに見まほ
しく思ひて造り初めにけん又年の



中子に添へて久方の

端の大嘗に。たがよ小忌の人等も
昔の鬘華の心ばせ木の花の木
を冠の中子に添へ立て久方の天の
日蔭のかづら垂て黒酒白酒の神酒
なりべ千代萬代も限らんと謡ひ舞
ふその袖をうかつていざやかなでん

拍子合ス
上
引立千代儼

月もおゝてる。難波の浦 序之舞

シテワカ上

鶯の聲ものどけき。春かぜに

地ノ神

頭ノ付
拍子ニ合

梅の匂ひや天に満つらん天に満つ

○仕舞

らん天に満つらんゆたけしや難

波の事か大君の恵みに洩れねば

草亦まで時をりをりを違へずして

花咲き實を結び人民もた安

らかに人民もた安らかに

明く



願くれば暮ら



花咲き實を結び



願くれば暮ら



たゞ久々に天地の

れば暮ら。暮られば明方の東の山
の端。匂ひそめて霞又ながらに明け
行くまにまに。緑の空にたなびく
白雲は天つ少女の天つ楮領巾。撫づ
とも撫づとも盡きせぬ巖もわが
君が代のたどへに足らぶな。幾
久に天地のたゞ幾久に天地の共に

榮えまゝおなごめであらう。

楠 露

作者 不詳

曲 柄 四番目(略二番目)
季 節 五月
種 古 韻 準高等ノ部
所 攝津國三島郡島本村櫻井

梗概

楠木正成(シテ)は朝敵尊氏の上洛を防がんと爲、攝津國兵庫の津に下りけるが、わが子正行(子方)を櫻井の驛に呼び、臣恩地滿一(シテ)とともに故郷千早に歸らしめんとせしに、正行は父に従ひて最期を共にせんと乞ひて聽かず。正成乃ち衷情を告げて曰く、われ尊氏追討の勅諭を拜したる時、疲れたる官軍を以て敵の大軍に當らんには、奇謀によらざるべからずと、策を獻せしも、傍臣にさゝられ用ゐられず。今はたゞ一死あるのみ。汝既に十歳に餘れり。よくわが言を耳に留め、わが亡き跡を繼ぎて、命のあらん限り帝位を守護し奉るべしと。正行終に父の言に服す。滿一、主正成父子の心を察して涙ながらに酌に立ち、「清き名を千代に傳へて菊水の、流れ久しき湊川」と、その誠忠をたゞへて舞を奏す。かくて時刻も移れば、正行は疾く歸れと促されて河内に歸り、父正成は後に留まり、父子ともに忠孝のかしこきためしとなりぬ。

謡ひ方

我が國歴史上、有名なる楠木正成が、櫻井驛にて、子の正行との、訣別を叙したるものにて、正成の心持、臣恩地滿一と子の心持などを、表現する處に、現在物の難しとする所なり、ともすれば實感に陥り易きを避け、心持は充分に現はすに苦心を要す、全曲悲壯なるものなれど、位は重からず、又此曲はシテを正成とする時と、又は滿一をシテとする時あり、又は兩シテとして扱ふこともあり。

△シテ正成 位を取りて、名乗はどつしりと「扱も朝敵」よ
り氣を變へ稍すらりと「又存する」と又氣を變へ少し抑へめ
に「いかに誰かある」と改めてすらりと「滿一に正行を」と
確かりと「いかに正行」とかゝつて「さてもこの度の」と語
は確かりと、文句に附けて心付け「又滿一には」と氣を變へ
抑へめに穩かに「これを此世の」と又改めてはつきりと「こ
ざかしき事を」とかゝつて「やあか程迄」とかゝつて手強く
「この上は」と閑かに「さても逆徒」と確かりと「正成謹ん

で」と下へ取りてゆるめ「荒手といひ」と元へ直し「其時正成は」とゆるめ「恐れながら」と慎ましく「必勝の計議を」と閑かに、サシは閑かに、上端は朗かに、ロンギは寛たりと「かくて時刻も」と乗つて閑かに諺ふ。

△シテ滿一「畏つて候」と閑かに、「いかに申上候」と慎ましく、ロンギは閑かに、浮かぬ様に「清き名を」とすらりと「諸人の」ワカは引立て、大きく諺ふ。

△子方 さらりと心持を附けず諺ふ「主従の」と三人にてシテの調子に附かず高く諺ふ。

△トモ さらりと諺ふ。

△地 「正行も満一も」とさらりと受け「泣く／＼」と柔吟にて少しゆるめ段々と閑める、クリはシテの諺に附かず強吟にてさらりと諺ひ出し、サシもさらりと「思ふなり」と閑め、クセは閑かに出で運んで、上端はすらりと「楠の露」と閑め「別れも今更に」とさらりと受け「流れ久しき」と引立て、たつぷりと「花橋の」より乗つてすらりと「とく／＼歸れ」とさらりと淀みなく、花やかならぬ様に諺ひ、留の「ありがたき」と閑めて諺ひ納む。

語釋

正成——河内の人、左大臣橘諸兄の裔、小宇多聞九、後兵衛尉となる。河内大守判官と稱す。元弘元年北條高時の官闕を

寺に幸し、賊をして京師に入らしむべし。臣河内に赴き近畿の兵を収め、河尻を塞ぎ敵の糧道を断ち、其困窮するを俟ち義貞と共に東西相應じて攻めば、賊敵必ず潰走せんと、諸公卿之を可とす。獨り藤原清忠其策を斥け、正成をして出で、戰に從はしめんとす。天皇亦之を可とせらる。正成武運の窮まれることを慨嘆し、敢て争はず、弟正季及び子正行を率ゐて櫻井驛に至り、正行を諭すに王事に励むるを以てし、天皇の賜ふ所の寶刀を與へて河内に還らしむ。即ち兵を進めて湊川に陣し、七百の小勢を以て尊氏の五十萬の大兵に當る。前後敵を受けて形勢甚だ危ふし。然れども屈せず奮戦し、正季を激勵して尊氏直義の軍を衝き破り、七難七遣幾んど直義を獲んとす、尊氏の新兵六千餘來り援く。正成轉じて之に當り、血戰十六合身に十一創を蒙る。依て正季と共に走りて湊川北の民舎に入り、正季を顧みて曰く、今日死を九泉に送る。吾子何所にか魂を託せんと欲するか。正季笑つて曰く、願くは七生人間に生れて賊徒を滅さんと。と、正成怡然互に藕刺して卒す。正成年四十三。一族十六人、郎黨五十餘人皆殉死す。天皇追悼して正三位左近衛中將を贈る。後明治天皇深く其忠節を嘉みし、従一位を追贈あらせらる。源光圀碑を湊川に建て「嗚呼忠臣楠子之墓」と題し、日本魂不滅の表幟とせり。尊氏——貞氏の子なり、其先は源義家に出づといふ。尊氏幼

犯すや、後醍醐天皇笠置に幸し給ふ。四方勤王の士未だ起らず王師極めて微弱なり。正成獨り馳せ參じて行在所に詣り、策を献じて城を赤坂に築き、義兵を擧げて逆賊高時を討つ。苦戰難鬪克く臣節を全うす。新田義貞、足利尊氏等刺戟せられ、大義を唱へて鎌倉、六波羅を陥れ北條氏滅ぶ。天皇隠岐より京に還幸し給ふ。正成功を以て檢非違使左衛門尉に任せられ、河内守となり、河内、攝津、和泉三國の守護となる。後足利尊氏反叛するに及び、正成諸將と共に京師を守護す。延元元年、尊氏官闕を犯す。正成兵五千を以て之を宇治に禦ぐ。尊氏の大兵克ち勢ひに乗じて京師に入る。天皇延曆寺に幸し、正成行在所を守護す。義貞及結城宗廣と共に尊氏を攻む。正成火を出雲路に放ち、糺森より進む。官軍大に利あり尊氏西に走る。正成奇策を案じ、一卒の能く泣くものをして死屍を索めて泣かしめ、正成、義貞、顯家等の死を語らしむ。尊氏の兵之を開き傳へて、守備爲に怠る。正成進みて京師に入り、火を放ちて掩撃し、尊氏の軍を破る。尊氏大敗して海に航し、九州に走る。正成追撃せんと欲す、義貞從はず、遷延夏に及ぶ。尊氏、直義西國の兵數十萬を率ゐ、水陸並び進む。義貞勳を奉じて兵庫に赴き、之を禦ぐ。正成召されて官闕に至り、乃ち策を献りて曰く、今尊氏等の兵勢猖獗を極む。我疲勞の兵を以て遽かに當るべからず、願くは車駕再び延曆

名高氏又太郎と稱す。下野の人、元應二年從五位下治部大輔に叙せらる。後北條高時を討ち、京師六波羅を圍み、之を敗りたる功を以て鎮守府將軍となり、從四位下左兵衛督となり續いて從三位となり、天皇の諱字を賜はりて尊氏と改め、建武元年の論功にて、武藏、常陸、下總の守護職となり、正三位參議に叙任せらる。正平十三年四月癘を病んで薨す、年五十四。從一位左大臣を追贈せらる。長祿の初め太政大臣を追贈せらる。爲人宏器英明兵を用ひ將士の望みを得るに最も妙才あり。其金銀を散じ領土を領ちて惜まざるが如きは、實に足利十三代の大業を拓くの根底をなしたるものなり。又和歌、繪畫に長じ、其作物世に知らる。南北朝の争鬪は當時武門の聲望を失ひ、中興の鴻業稍々其制を過ち、朝家を怨むの將士多く、却て尊氏の勢威に歸服するに至りしが因をなせしにあるべし。義貞——上野國新田郡の人、幼名小太郎と稱す。世々世良田の邑を食む。元弘年中護良親王の令旨を奉じて義を唱へ、一族及び甲斐、信濃、上野、下野、上總、常陸、武藏の諸源氏の兵を率ゐて、北條泰家を破り直に鎌倉を衝く。極樂寺坂の險頗る抜くに苦しむ。義貞神異を祈つて海水を瀉らし、敵船を漂はせ、其虚に乗じ急に兵を靡きて進む、北條の兵大敗し鎌倉遂に陥る。功を以て左馬助を授けらる。建武元年從四位

上左兵衛督兼播磨守に任ぜられ、上野、播磨を領す。延元三年七月越前足羽河の戦に其頸を射られ、乃ち免るべからざるを察し自ら刎て卒す。年三十八。明治九年十二月、明治天皇其忠節を嘉みし正三位を贈り、同十五年八月正一位を追贈せらる。

正行 — 正成の子。父の湊川に戦死するや、遺誠を守りて愈々忘れず、群童と遊戯するも軍事に擬して尊氏を噓すといふ。長じて大義を唱へ、和田正朝と共に南帝を吉野に護る。正四位下に叙し帶刀となる。後醍醐天皇崩す。後村上天皇立つ。正平二年兵を紀伊に發し、河内に歸つて池尻の賊を討ち、更に八尾に轉戦す。細川顯氏、山名時氏の大兵を瓜生野に破る。尊氏、高師直同師泰を遣はし、兵六萬を發して正行に當らしむ。正行一死以て王事に報効せんと欲し、行在所に至りて龍顏を拜し、如意輪堂に赴きて同盟決死の名を壁に記し、又歌を其後に書して曰く、「返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ留むる」と。正行進みて四條畷に戦ふ。敵の大兵敗るゝこと屢々なりしも、衆寡敵せず正行身に重創を負ひ、矢を被ること恰も蝟の如く、弟正時と交刺して斃る。時に年二十三。明治十年、明治天皇其忠勤を嘉みし従三位を贈られ、同三十年四月從二位を追贈せらる。

滿一 — 姓恩地氏、名左近太郎といふ。正成の死後正行を援

けて擧兵のこと本朝武功傳に見ゆ。古記録には見えず。千早 — 河内國金剛山の西方山腹、正成の城を築きし險阻の地。

弓矢の家 — 武士の家をいふ。

ござかしき — 小利功といふに同じ。

逆徒 — 朝廷に叛く徒輩をいふ。

靱山 — 比叡山延曆寺を云ふ。

坊門殿 — 藤原清忠。左近衛中將俊輔の子にて、左大辨參議たり。坊門とは清忠住地の名稱なり。

さへ — 妨げ。反對の意。

日月上に明らかなれども云々 — 佞臣龍侍が君の英明を蔽ひ

處置を誤るに譬ふ。淮南子に、「日月欲明浮雲掩之」とあり。

良藥口に苦く云々 — 孔子家語に、「良藥苦於口、利於病、

忠言逆於耳、利於行」とあるを引く。

藤原 — 藤原宣房の子、正二位中納言に叙せらる。南朝の爲

に忠誠を致せし人。太平記第十三卷、藤原卿遁世の事に、「其

後藤原卿、連續して諫言を上りけれども、君遂に御許容なか

りしかば、大内裏造營の事をも止められず、蘭籍桂筵の御遊

猶頻なりければ、藤原是を諫めかねて、臣たる道我に於て致

せり。よしや今は身を退かんには如かじと、思ひ定めてぞ御

ばしき意をいふ。

座しける。(中略)藤原致仕のために參内せられ、龍顔に近づき進らせん事、今ならでは何事にかと思はれければ、其事となく御前に祇候して、龍逢比干が諫に死せし恨、伯夷叔齊が潔を踏みにし跡、終夜申出で、未明に退出し給へば、大内山の月影も、涙に陰りて幽なり。陣頭より車をば宿所へ返し遣はし、侍一人召具して、北山の岩藏と云ふ所へ赴かれける」とあり。

引きは返さじ — 再び引き返らじとの意。即ち生きて返らじとのこと。

矢たけの心云々 — 武士の心節潔白なること猶竹の心節清直なるに喩へていふ。

獅子の子を云々 — 獅子は子を谷に落して其勢力を試みるといふ古事。

羽をのし云々 — 叛逆の徒の勢を恣にする事を猛禽に譬ふ。

撫子 — 愛育する子をいふ。

ふる枝 — 五月雨の降るといふを承けし言葉。

石になるてふ云々 — 楠は化石となる樹種なりと云ふこと。

正行の墓所の落首に、楠のあとのしるしを來て見れば誠に石になりけるかな」とあり。朽ちざる意をいふ。

菊水 — 楠木氏の家紋。

花楠 — 楠木氏は楠諸兄の後裔なる故に、楠にかけて匂ひ香



装束附(楠露)

シ	子	ト	シ	装束附(楠露)
子	方	モ	子	
思地滿一	楠木正行	太正刀持成	楠木正成	
直面 侍烏帽子 襟赤 着附厚板 白大口 掛直垂 繡紋腰帯 小刀 神扇	小結烏帽子 襟赤 着附厚板 白大口 長絹 繡紋腰帯 扇	直面 襟萌黄 着附無地腕斗目 素袍上下 扇 持太刀	直面 梨子打烏帽子 白鉢巻 襟浅黄 着附無紅厚板 込大口 上下直垂 小刀 神扇 巻物	

楠露

素謀座席順

満正正ト 一行モ

シテ正成詞 気高く確カリト

これは楠木正成なり。さても朝敵尊

氏大擧して上洛すべき由聞し召さ

れ。急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞に

力を合はせよとの宣旨に任せ。唯今

兵庫の津へ罷り下りゆ。又存する

子細の由問。正行を古里へ帰さば



やと思ひ實タリいかに誰かある御前上七太刀持サリ
 正成正成 確カリ満一ミツカズに正行をつれて此方へ
 来れと申し少へトモサリ畏つていかに
 恩地殿オシチに申しいかに若君ワカギミの御供申し。
 急ぎ本陣ホンジンへ御参りあれとの御
 事にていかにミツカズ 確カリ畏つていかに申し上げ
 いかに正行正成 確カリト氣ヌレ。
 若君ワカギミの御供申ししていかに正行。



いかに正行



唯今申す事をよくよく聞きいかに確カリ
 もこの度の出陣。正成討死すべき時
 こそ至りたれ。それにつきて正行は、
 満一ミツカズを伴ひ。千早チハヤに帰り命のあらん
 程は忠勤し。上ウヤマを敬シモひ下アハレを憐アワみ。
 某ソレガシが志ココロをつぎいかに。又満一ミツカズには。正行の
 成長セイヤウの程チカラを頼むなり。これをこの

世の別れと思ひて。急ぎ古里へ帰り
 子方正行サラリ 仰せ謹んで承りゆくりながら弓
 箭の家生まれ。父の最期をよそに
 見て誰に面を向けゆべきたたむし
 具してたまはりのゆへ 正成カリメ確カリ
 申す者かな。これ皆朝廷の御為なれ
 ば。とくとく千早に帰りのゆへ 子方サラリ
 いか



君の御為なりとも。罷り歸る事
 はなりがたうゆ 正成カリメ強キ
 が申す事に従はざるやと 恩愛の
 子を叱りければ 同上 正行も満一も。
 元へ戻シ 正行も満一も。何といふべき言の葉
 ヤ 正行も満一も。何といふべき言の葉
 ヨク 泣く泣く袖をしきりつ。畏つたる。
 けしきかな。畏つたるけしきかな

正成詞 因カニ確カリ

この上は語つて聞かせゆべし。 語気又し確カリ さても

逆徒尊氏兄弟。西海より大軍を

率ゐ。上洛すべき由叡聞に達し。

急ぎ正成に馳せ向ひ。義貞諸共

追伐すべきことの勅諭なり。 心持シ 正成

謹んで申し上ぐる様は。この度逆徒

罷り上る事。 確カリ 新平といひ大軍といひ。



勞れたる官軍を以て喰ひ留めゆ
はん事。なかなかな存じもよらず。

義貞を召し還され。今一度叡山

へ行幸なし奉りなば。 必ッ 定逆徒

上洛仕りゆべし。その時正成は糧道

を絶ち。義貞と内外より攻めゆはん

に於ては。 心持シ 恐れながら也。勝利疑ひ

あるべからずと。必勝の計議を申し
 上ぐるといども。坊門殿のさへにて。
 既に防戦に定まる事。偏に天運の
 極まりなり。ツクク。それ日月上に明ら
 かなれども。雲霧光を覆ふならひ。
 今にはじめぬ事なれども。歎きても
 またあまりあり。良薬口に苦く。

○サシ曲獨吟

忠言耳に逆ふといふ。その故事を
 悟り給ひ。藤房の卿は世を遁れ。今
 正成が首途も。引きは返さじ。武士の
 やたけの心節清く。世をいさめんと。
 思ふなり。獅子の子を生みて三日
 を経る時は。数千丈の巖より。これを
 投げて試みる。その子獅子の氣力

あれば教へざるに中より。はね返り
 て死せずといひり。況んや正行十歳
 に餘りぬ一言耳に留めつこの教
 誠に違はざれわれ討死と聞くとき
 も歎きを留めいづくまでも朝敵
 を平らげて聖運の開けん事を
 思ふべし正成上 引立テ確カニたとひ逆賊日の本に

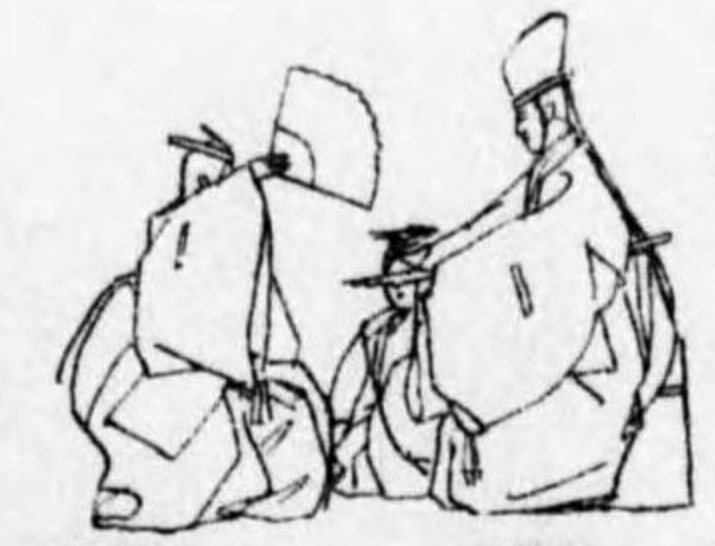


からほや楠の露

同

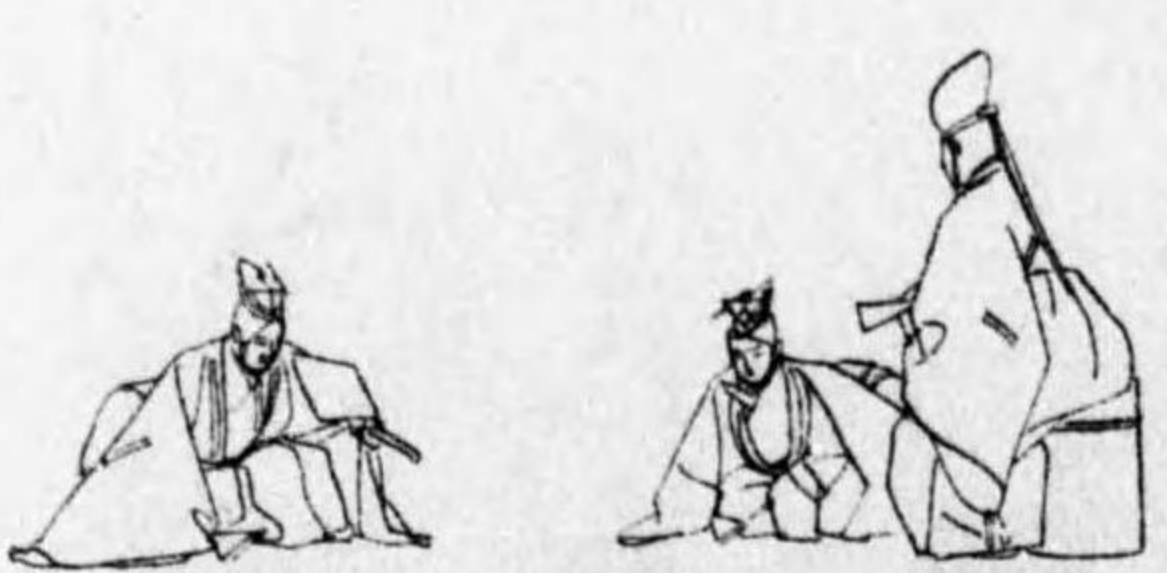
羽をのし嘴を鳴らすとも命の
 あらんその程は帝位を守護し
 わたくしの心聊かなき跡に汚名
 を残す事なかれ生先思ふ撫
 子にかる涙や楠の露満口ギ上時しも
 頃は五月雨の古枝も茂る下草
 の霽にしをる袂かな正成上花散りて

春は暮れにし櫻井の名にだに
 ありて朽ちせざる 石になるてよ
 楠の葉の恨みも何かあまざかる
 鄙人までもあはれ知る 恩愛し親
 子主従の別れも今更に涙を
 袖に満一がお酌に立ちて取りあはず
 清き名を千代に傳へて菊水の



満一上 気ラカト朗カニ
 拍子合ハズ
 満一上 子成三人 同 子方三人

地流れ久しき湊川 男舞
 諸人の鑑となりてますらをの
 花橋の匂ひぬるかな匂ひぬるかな
 かくて時刻も移るなる ときとく
 帰れといさぎよき 仰せに従ふ主
 従は盡きぬ涙をひるがへしその
 名も清き河内の國へ 歸るは孝



地上 朗カニ
 頭付 拍子合
 正成 申



その名も通る
河内國へ

行留まるは忠義の。かゝこきため
しぞ。ありがたまき

楠露

ヤキ

木曾

作者不詳

曲 四番目(略二番目)
季節 五月
種古 重習奥傳(願書を抜け平物)
所 越中國礪波郡埴生村埴生八幡宮

梗概

木曾義仲(ツレ)は越前國燈が城に平家と戦ひて敗れ、越中國礪波山中埴生に陣して奇勝を謀れる折しも、ふと北の方を見れば、夏山の繁みの中に、朱の玉垣ほの見えて、片削造の社あり。あれはいづく如何なる社ぞと問へば、池田次郎(ツレ)埴生の八幡宮と答ふ。義仲、何となう陣を取りし所の、八幡の御地なるこそ吉兆なれとうち喜び、覺明(シテ)をして願書を認めしむ。覺明即ち小硯料紙を取り出だし、八幡大菩薩の神徳をたゞへ、平家の横暴を敷へ、君國の爲に義仲のこれを討滅せんとする志をのぶ。義仲これに上指の鎬矢を添へて奉納せしむれば、折しも土民酒肴を携へ來りて軍の門出を祝す。義仲いよく喜び、酒宴を開き、覺明立ちて舞へば、不思議や八幡の方より山鳩翼を並べて味方の旗手に飛びかけり、納受のしるしを現せり。かくて義仲はたゞ一戦に平家の大勢を俱利伽羅が谷に追ひ落して、大勝を博しぬ。

謡ひ方

本曲の内の願書は、安宅の勸進帳、正尊の起請文と共に三願物と稱し、此願書は重習、奥傳なれども、願書を抜きて謡ふ時は、位といふ程の事はなくて、さして重からず勇健にさらりと謡ふ、猶願書を獨吟する時は「木曾殿を初めとして」よりを抜き左の文句となる。

義仲願書に鎬矢を神前に捧げ申
せば、御供の兵どもも、上矢の鎬を
一つづかの寶前に捧げて、南無
歸命阿彌陀佛。八幡大菩薩にて皆
禮拜を乞はらする

△シテ 木曾義仲の參謀たる覺明なれば、堂々として剛健に一セイを謡ひ出し「落さんと」と確かり「用意をなして」と

勢を込めずらりと「御前に候」と重んじると、以下義仲との掛合は叮嚀にどつしりと、「覺明仰を」と大きく「又此莊の土民」と氣を變へ「八幡の宮の神風に」と引立てたつぷりと誦ふ。

△ツレ義仲 主將なれば威を保ち、常のツレの如く、軽く誦はず、朗かにすらりと誦ふ「いかに覺明」と氣を變へて殿そかに誦ふ。

△ツレ池田 主ツレなれば、さらりとしたる内に手強き心あるべし、素誦にては一聲以下立衆の所は、シテ、義仲、池田三人にて誦ひ、外の立衆を略することあり。

△地 「箆のうちよりも」と力の抜けぬ様に寛たりと受け「書きをはる」と閉め「木曾殿を始めとして」と改めてすらりと「参りけり」と返しを閉め「敵は木の葉」と引立て、大きく「酒宴もすでに」と乗つて朗かに「さてこそ平家の」より以下段々と進む心にて晴れ晴れしく誦ひ納むべし。

△願書は前にも記せる如く重習中の重きものなり、始めの「何々歸命頂禮」は序の位にて拍子に合はず、閑かに堂々とどつしりと出で「寶祚を守らんが爲め」より拍子に合はせて「押し開き給へり」と閉め打切りて「こゝにしきりの年より」より破の位となりすらりと運びめに「王法の敵なりそもそも」と閉めて打切り「曾祖父前の」以下急の位となり運んで剛健

御領の地——八幡宮神領の土地をいふ。

覺明——海野信濃守幸親の子なるが、藏人通廣とて、勸學院に居られしが、後出家して西乗坊信教とぞ名乗り、奈良興福寺の僧となる。治承四年高倉宮園城寺へ入御の時、以仁王令旨を奈良の衆徒へ遣はさる。南都の大衆如何思ひけん。その返書を此信教に書かせける。平家物語、木曾の願書の事の中に、「抑清盛入道は平氏の精髄、武家の塵芥とぞ書いたるける。入道大に怒つて、何條その信教めが、淨海ほどのものを平氏のぬかかす武家の塵芥と書くべきやうこそ奇怪なれ。急ぎその法師搦め捕つて死罪に行へ」とあり。依つて通れ下りて義仲に仕へ、太夫坊覺明と號す。仁治二年死す。

料紙——願書を書くべき爲の紙。

三身の金容を顯はして——行政和尚、豊前國宇佐八幡宮に詣でしに、八幡大菩薩金色の三尊の御姿にて、行教の衣に御影を寫し給ひしことをいふ。是れ即ち男山八幡宮を勸請せし始めなりといふ。三身とは、法身、報身、應身の三つなり。

三所の權扉を——三所の權扉とは、宇佐八幡宮に祭れる應神天皇、神功皇后、玉依姫の三座の假のとほそを開き給ふの意。即ち行教の参詣の時の事なり。しきりの年より以後——この年頃、近年、數年來といふ意。

に淀みなく誦ふ、三讀物の中にも尤も合方の難かしく誦ひ難き大曲とせらるゝものなり。

能の異式（小書）

願書 此小書がなければ、シテは願書を読まさる故に習物でなく平物となる。

恐之舞 舞が替る。

語釋

八百萬神——總ての天神地祇を稱す。

燧が城——越前國南條郡湯尾村にあり。

礪波山までせめくだる——礪波山は加賀越中の國境にあり。

壽永二年五月、平家の大將小松三位維盛押し寄せたるなり。

黒坂——礪波山の内にあり。

追手搦手——城の表門を追手といふ。即ち敵を追ひ走らするの意。裏門を搦手といふ。即ち敵を捕ふるの意にて、共に稱呼とせらる。

くりからが谷——礪波山の内にあり。

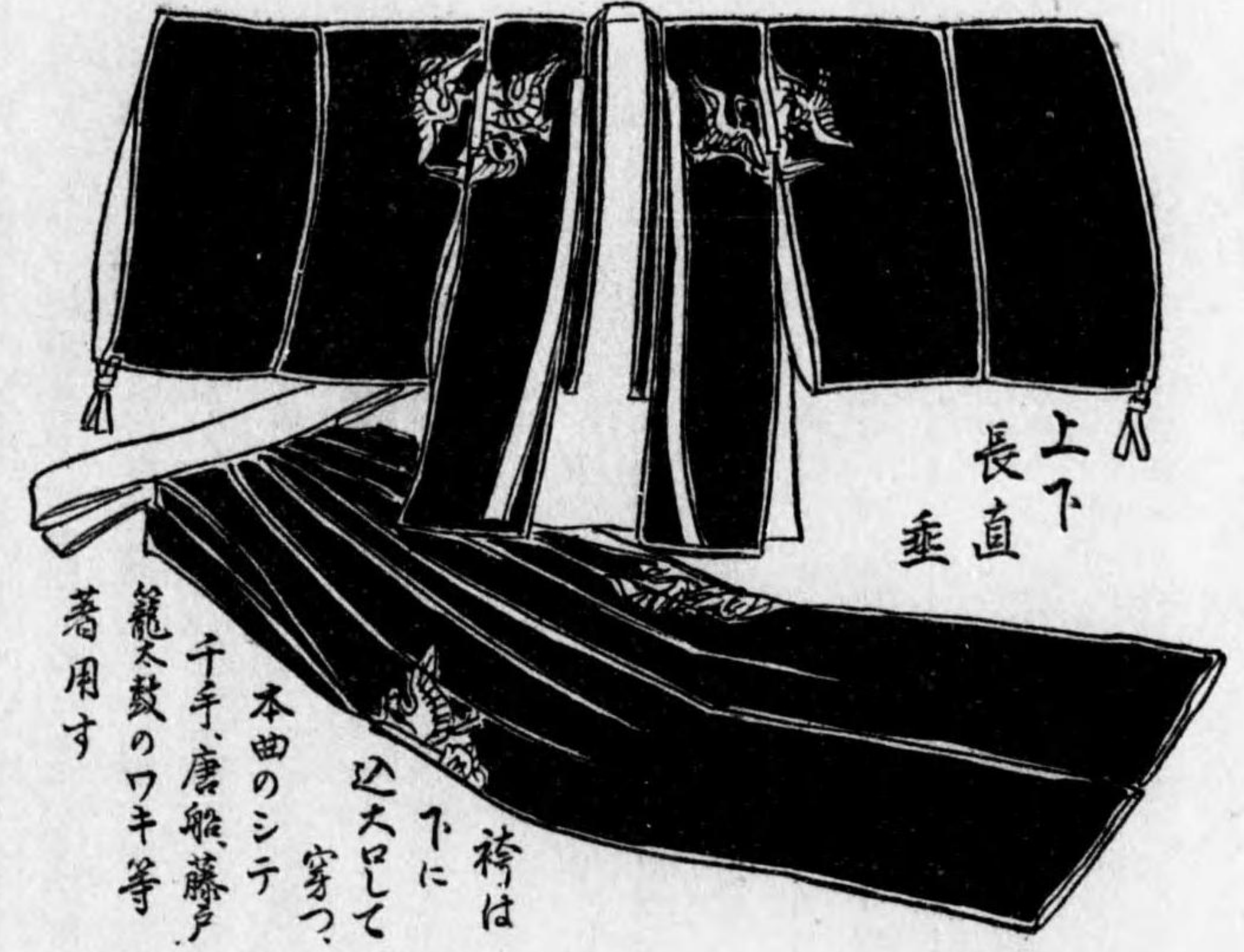
壇生——礪波山の東方にありて、越中の國礪波郡壇生村なり。

矢合はせ——戦を交ふること。

池田の次郎——名は忠康、義仲の家臣なり。

かたそぎづくり——千木造りといふに同じ。千木とは、社殿の屋根に打ち違ひに高く聳えたる木をいふ。

平相國——太政大臣清盛のこと。
前の陸奥の守——源義家のこと。
嬰兒の蟲を以て云々——小兒が蛤貝の類にて、大海の水を汲み量るに等しく、自身に不相應なりとの意。前漢書、東方朔の傳に見えたる語なり。
蠅蠅が斧を以て云々——かまきりと云ふ虫の挽きつぶさるゝも忘れて、盛に輪のめぐりくる車に打ち向ふが如きをいふ。
斧は虫の手の鋭きに譬へていふなり。文選に、「欲以蠅蠅之斧禦隆車之墜」とありて、註に、「前有兩足一擧之如執斧之象」と示してあり。
うはざし——鏑矢を箆に指し添ふるをいふ。鏑矢とは矢の根の處を空虚にくりたる木にて作れるをいふ。もとは音を立て敵を恐れしむるためのものなれど、後には多く神前に納むるなどの事に用ふ。



ツレ	ツレ	シテ	ツレ	装束附 (木曾)
池田次郎	立衆四、 義仲ノ臣	明	木曾義仲	
直面 梨子打烏帽子 白鉢卷 襟紺 着附厚板 半切 法被 繡紋腰帯 太刀 神扇	直面 梨子打烏帽子 白鉢卷 襟萌黄 着附厚板 白大口 側次 繡紋腰帯 太刀 神扇	直面 袷装頭巾 襟縹 着附厚板 込大口 長直垂 太刀 翁扇 文	直面 梨子打烏帽子 白鉢卷 襟浅黄 着附厚板 半切 法被 繡紋腰帯 太刀 神扇 弓矢	

木曾

素謡座席順
立池田衆
木曾

シテ覺明上
ツレ立衆
一セイツヨク
拍子三合ハズ



八百万神も引きますかこの名の。
 弓矢の道こそ久しけれ。そも
 そもそれは木曾義仲とはわが事
 なり。さても平家は越前の。
 燧が城を攻め落し。都合その勢
 十萬餘騎この礪波山まで押し

寄する。味方は僅か五萬餘騎。計略をもつて防がんとて。白旗立シテ手強ク數多しとのへつ。黒坂の上にお立衆シテし立て。敵の心を疑はしめ。山中にたむろさせ。夜に入り大手搦手カラムより。一度にかり便利迦羅カが。谷へ敵を落さんと。用意を上歌。

○小諸



なして義仲は。用意をなして義仲は。勢を七手に別ちつ。その身は殊に精兵。一萬餘騎を引き從へ。埴生に陣をぞ取りにける。埴生に陣をぞ取りにける。いかに申し上げぬ。赤坂の如く黒坂の上は多く。の白旗を立てし。いば。平家の勢

これを見てあはや源氏大勢向う
 たるは取りこめられてはかなよま
 じ。ごは便宜の所なりと礪波山
 の山中猿が馬場と申す所に陣
 を取つてい 木曾朗カミ それこそ義仲が
 願ふところなれ。さあらば矢合は
 明日たるべし。かまへて味方をいま

しめ戦はずして。夜に入つて押し
 寄せせうずるにてい。面々にその由
 申しゆへ 池田サリ 畏つてい 木曾氣ヲサリ いか池田
 の次郎 池田サリ 御前にい 木曾朗カミ これより北に
 あたつて夏山の繁みの中に朱の
 玉垣ほの見えて。片削造りの社
 あり。あれをばいつくと申すぞ。如何

なる神をあがめ奉りたるぞ 池田サライ さん

バあれこそ埴生の八幡宮にて渡

らせ給ひぬ。この所もその由領の リヤウ

地にて 木曾朗カニ 義仲何となう陣敷 スト

りしに。八幡の御地なるこそ吉兆 キチテウ

なれ。いかに覚明 シテ重シモリ 御前に シテ重シモリ

木曾朗カニ 且は後代のため一つは當時の祈禱 トオ

のため。願書を参らせうと思ひは

いかに シテ重シモリ 由縁の如く由願書を由奉 ホウ

納あつて然るべう 木曾朗カニ さあらば願

書を書きま シテウケテ 畏つて カハル上 覚明 確カリ

仰せを受けたまは 同上 服の エビラ ち 元メ

よりも 希 服の 元 ちよりも コ 小硯料 スズ

紙取り出だし。墨すり筆を和 シ

願書小書ノトキ
 口以下一句カハ左
 やがて願書を
 書き終り前
 に於て讀み上
 ぐる
 ▲願書
 能素諡時何々
 南無トカヘテ
 諡



けるが。思ひあんとする氣色もなく。
 古書をうつすが如くにてやがて
 願書を書き終る。何々帰命頂
 禮八幡大菩薩は日域朝廷の本
 主。累世明君の曩祖たり寶祚を
 守らんがため蒼生を利せんが
 ために。三身の金容を顯して。

三所の権能を押し開きたまへり。
 平相國といふ者あつて四海を掌
 にし。萬民を憐れむこれ佛法
 のあた。王法の敵なりとも曾
 祖父前の陸奥の守名を宗廟の
 氏族に帰附す。義仲いやくも。

その後龍としてこの大功を起す
事。たとへば嬰兒の蠶を以て巨
海を測り。蟪蛄が斧を取つて。
龍車に向ふ如くなり。然れども
君のため國のためになれを起す
のみなり。然して願はくは神明
納受垂れ給ひ。勝つ事を究めつ。

あたを四方に退け給へ。壽永二年
五月日と。高らかに讀み上げたり。
木曾殿を初めとして。その座にあ
りし兵ども。誠に文武の達者か
なと。皆覺明をほめにつけり。
義仲上。差抜き出だし。これを願
書に取りそへて。内陣に納めよと。

○小謠
木曾上 朝カニ

下

下



覚明これを持ち得ら



覚明に賜はれば。覚明これを捧げ
 持ち御前を立ちてゆ。しくも八幡
 の宮に参りけり。八幡の宮に参り
 けり。いかに申し上げゆ。願書並
 に御上差の鏡。八幡の宮に奉
 納仕りてゆ。又この莊の土民。軍の
 御門出を祝。酒肴を奉りてゆ

木曾頭カニ



八幡の宮の神風



酒肴も御にまかせ

かかるめでたき事こそなけれ。この
 度の軍に勝たんずる事必定なり。
 さらば軍の門出を祝ふべし。覚明酌
 に立ちゆへ。畏つてゆ。八幡の宮の
 神風に。敵は木の葉と散りぬべし
 いかに覚明一さし舞ひゆへ。畏つ
 てゆ。敵は木の葉と散りぬべし。男舞

木曾詞

地弓丸

○獨吟

同
サ
ラ
リ



山鳩翅をならべ



皆一同に伏

酒宴も既になかばなりしに。酒宴
も既になかばなりしに不思議や
八幡の方よりも。山鳩翅をならべ
つ。味方の旗手に飛びかけり。納
受のしるゝをあらはしければ。木
曾殿を初め。軍兵ども。皆一同に伏
し拜み。いよいよ加護をぞ願ひける。

俱利伽羅に追ひ



氣力サリ以下段々進ム

さてこそ平家の火勢を。俱利伽羅
が谷に追ひ落した。一戦に勝利
を得しも。まことに八幡の神力
なり。

昭和九年四月十日納本
昭和九年四月十五日發行

桐木與書

著作權所
不剽



昭和九年

觀世流

訂正著作

世四世

觀世左近

發行兼
印刷者

東京市神田區錦町二丁目十番地
檜常之助

發行所

振替東京三五五番電話神田二五二番
檜書店

京都店

京都市二條通越屋町東北角
振替大阪三六八番電話上二九〇番

終